〈資料〉

保育者養成課程におけるピアノ教則本の一考察

正木　文惠
（人間学部子ども学科）

A Consideration of the Piano Instructional Books in Nursery School Teacher Training Course

Fumie MASAKI
（Department of Child Studies,Faculty of Human Science）

It is very important to the early education of children that they adopt music experience on their brains and physical developments, and it is inevitable that nursery school teacher acquires high music ability. In this report, I reflected piano instructional books used conventionally and considered revised plans of the manuals depending on the needs of the students. To some second graders in my course, I performed questionary survey in the simple accompaniment and grasped the actual situation of the piano performance practical skills. The piano instructional books should be chosen by the purposes, minds and physical features of persons targeted for learning. For students wanting to be nursery school teachers, I think about the constitution of a better piano instructional books while considering the effectiveness and the problems of “Bayer” and "Burgmüller 25".

キーワード：ピアノ教則本、保育者養成課程、ピアノ実技指導、ピアノ導入期、保育現場

はじめに

早期教育における音楽指導について多くの研究がされているが、その重要性について幼児～児童期（4歳～12歳）に音楽教育を受けることで脳と身体の発達に影響を及ぼすことが指摘されている（古屋, 2011）。このことから、保育者自身が音楽知識を身に付け、普段から子ども達に音楽の素晴らしさを伝えることは大切であると思われる。

昨年実施した本学の保育士・幼稚園教諭志望の学生対象のアンケート調査結果では、半数以上の割合で過去に何らかの音楽経験をし音楽の素養を持ち得ているが、音楽の基礎的な演奏技能や理論の習得が不十分であり苦手意識を感じている学生の実態が明らかになった。また、能率的にピアノ指導を行う上で従来の教材を見つめ直し改訂を行うことも重要であると結論付けられた（三森ら, 2019）。

本学科「音楽Ⅰ」の授業において、ピアノ初心者対象に『バイエル教則本』、そして『ブルクミュラー25の練習曲』を教材として使用してきたが、指導する上で、これらの教材は学生にとって有意義な内容であるか懸念が生じた。

本稿では、保育者養成課程の学生を対象とした教材作成を考え、学生が短期間でより実践に役立つ奏法を習得するにはどのようなメソッドを取り入れればよいか考察する。また、必修科目「音楽Ⅱ」の授業終了時、「音楽Ⅰ」、「音楽Ⅱ」と1年間を通してピアノの授業で得た技能が実践的に役立つかどうか把握する為、筆者が担当する「音楽Ⅱ」の履修学生対象に簡易伴奏に関するアンケート調査を行った。このアンケート調査結果を踏まえより良い指導法を論じる。

1.　導入期におけるピアノ学習の進め方

ピアノ初心者の演奏内容ついて問題視されることはピアノ演奏基礎である正しい姿勢・手の形が整わないまま課程を終了することである。多くの教則本では練習曲の前に姿勢に関する説明が冒頭でされる（例えば全訳バイエルピアノ教則本, 1955）等、正しい演奏姿勢は技術を向上させる上で重要であると説明されている。この為、導入期から手の正しい形を保ち指先を強化させる練習を施した上で、リズム奏の教則本に移行させることが上達への近道であると考えられる。

一方、読譜力が十分に身に付いていない学生が多いことも問題である。将来、実践の場において簡易伴奏をする際、旋律と和声に対して柔軟に対応できる初見の能力が必要である。

『バイエル教則本』は明治初期、文部省が音楽教育を実施する為に設置した「音楽取締掛」（1879）の付属音楽学校で、1820年（明治13年）、アメリカ合衆国の音楽教育者メーソンが持参した20冊の英語版『バイエル』（丸山, 2017）、が発端となり将来子ども達が演奏家を志す技術が習得出来るように考えられている。しかし、保育者を志す学生はピアノの基礎演奏技能は必要であるが、将来プロの演奏家になる為のピアノメソッドは必要でなく、保育現場で役立ちかつ教育者として音楽的素養を培うことが重要であり、目的意識に差異が生じる。まず『バイエル教則本』の有効性として、①音符の学習では拍感とリズムの対比、全音符から複付点リズムまでを段階的に学ぶことが出来て分かり易い、②ハ長調の練習曲を徹底して学ぶことで音感が習得出来る、③65番から100番までスケールに関する楽曲が18曲あり、くぐり指・またぎ指の予備練習に繋がる、④それぞれの曲が短く構成が明確で、スラー・スタッカート・強弱表現・速度記号等の基礎的な音楽知識が得られる。一方、問題点として、①54番に入ってようやくヘ音記号が現れ、ヘ音記号の読譜が遅れると同時に中央ハ音を軸とするト音記号ヘ音記号の並列と鍵盤関係に戸惑う、②1番から64番まで5指の定位置による楽曲が反復され無駄を感じる、③各技術に応じた表題作品が盛り込まれておらず、練習曲のみの構成はやや機械的に感じ楽しさに欠ける、④70番台から調号・臨時記号・リズムに関して難しくなるが、それに伴う反復練習が少ない。

『ブルクミュラー25の練習曲』の有効性として、①基本的なテクニック習得後、ドイツロマン派作品を学習することで、豊かな音楽性を養い感性を高められる、②表題を参考に創造力を発揮し独創性を補える、③音楽的に奏する上で、手首を用いたレガート奏法、曲調を表現する上で様々な強弱表現、更に演奏技術の取得、が挙げられる。しかし、『ブルクミュラー25の練習曲』において幾つかの問題点も考えられ、①19世紀の作曲家によるロマン派の曲はタイトルや曲の趣がヨーロッパの伝統に基づき古めかしい、②主に幼児から児童対象のピアノ教育本であり、保育者を目指す大学生にとって内容的に相応しいかどうか、保育現場で役立つ初心者向けのロマン派作品集を学習する方が妥当でないか、③25曲中6曲しか短調がなく、調性のバランスが問われる等挙げられる。作品への感情移入も考慮されるべきであり、学生の精神年齢や身体的特徴を考慮した教材が求められる。

2.　簡易伴奏に関するアンケート調査

⑴　目　的

本学科では、必修科目「音楽Ⅱ」で簡易伴奏法・弾き歌いの授業を行っている。この授業は、実践の場において保育者が本質的に関わる必須の内容である。この度、簡易伴奏を通して過去の授業内で得たピアノ実技力は正しく身に付いているかアンケート調査を行った。これは、今後の指導方針とピアノ教則本の考察に役立てる目的で実施した。

⑵　実施方法と倫理的配慮

調査対象者は、本学科「音楽Ⅱ」履修者の一部18名（筆者の担当学生）である。倫理的配慮として、アンケート用紙に利用目的・実施目的を記し、このアンケート調査は研究目的であり、個々の学生の成績評価や今後の対応には一切関係のないことを口頭説明及びアンケート調査に明記した。また、強制的に調査は行わず、ご協力頂ける方のみと明記し快諾の上無記名で行った。回収方法として、アンケート調査は裏返してファイルに入れ、学生の順番が不明瞭となるよう、その都度手で混合させた。（調査実施日：2019年1月7日）

⑶　質問内容と解答方法

アンケートでは、「音楽Ⅰ」の授業で使用した教材名の明記、ピアノ実技で不得意と思われる内容、「音楽Ⅱ」の簡易伴奏法の難易について、楽譜に明記されている指使いの捉え方、コード伴奏・既存楽譜についての難易について、の各項目を選択方式で回答させた。

⑷　アンケート調査結果と考察

「音楽Ⅱ」の履修者の一部 18 名を対象にアンケート調査を実施した結果、「音楽Ⅰ」の授業開始時、『バイエル教則本』を使用した学生 11 名、『バイエル教則本』終了から『ブルクミュラー 25 の練習曲』を使用した学生 6 名、『ブルクミュラー 25 の練習曲』から『ソナチネ』を使用した学生 1 名、『ソナタ』以上の学生 1 名であり、ピアノ導入期の学生が大半であった。このうち、『バイエル教則本』を使用した学生に教材の有効性について問うと、高い確率で教材が役立っているとの回答を得た（図 1）。

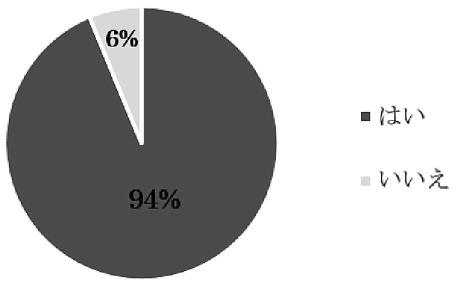

図１　バイエル教則本は役立ちましたか

この結果は大変興味深いことであり、『バイエル教則本』は有効性の高い教材であることが言える。ただ、実際に授業内で『バイエル教則本』が難しいと訴える学生も少なくない。何故『バイエル教則本』は難しいと感じるのか、その要因と打開策を今後の研究から見出していきたいと思う。

次に、ピアノ実技で何が不得意か質問をした結果、下記の回答を得た。この質問事項は、16 項目のピアノ奏法を取り上げ、不得意と思われる項目を５つ選択する方法であるが、圧倒的に指使い（くぐり指・またぎ指）が難しいとされ、続いて拍感・リズム感の捉え方、強弱表現、黒鍵を弾く時、指の速い動き、感情移入、へ音記号と続いている。指使い（くぐり指・またぎ指）は重要であり、特に童謡の旋律線をなめらかに歌わせ、フレーズ感を表現する為には必要である。この結果から、比較的早い段階からスケール奏法を学習させ、どのようなフレーズにも柔軟に対応出来る指使いを習得させる必要がある。また、拍感・リズム感が不明瞭な学生も多く、音楽理論の知識を深めることは最もであるが、身体を使ってリズムを把握しリズムが表する躍動感を体で体験することも解決策の一つである。手段としてリトミック的な音楽教育が挙げられるが、音楽ゼミ等課外活動で導入されると良いかもしれない。ヘ音記号にも苦手意識を感じる学生は多く、早い段階から中央ハ音からのト音記号へ音記号における大譜表楽譜に慣れることも重要であると考えられる（図 2）。

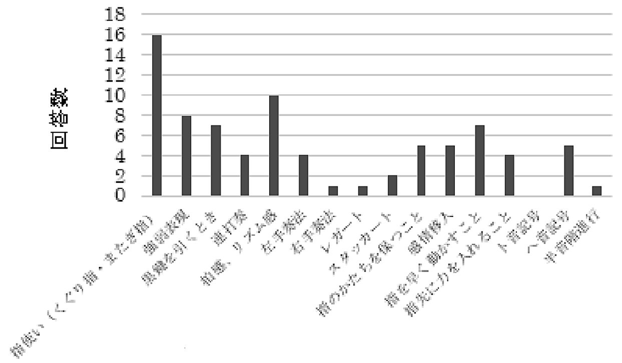

図２　ピアノ実技で何が不得意ですか

指使いについて学生に質問した結果、過半数以上の学生は、楽譜に明記された指使いを忠実に守ろうとする姿勢が伺われるが、指使いを無視している学生も存在する。楽譜に記されている指使いは全ての人に適応するとは言い難く、個々にあった弾きやすい指使いに変更することもあり得るが、重要なことは指使いを統一させることである。指使いに関しては、読譜の先見性も重要であり、フレーズが１小節先あるいは２小節先どのように構成されているか、目で先を追いながら指使いを工夫しなければならない。この判断力は演奏の慣れから生じる為、多くの楽曲を読譜し的確なフレーズ奏を取得することが重要である（図 3）。

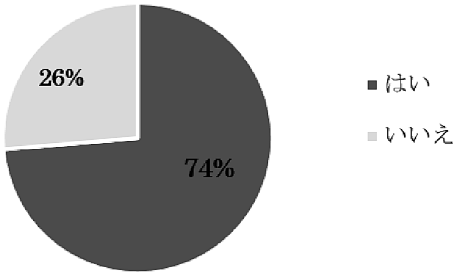

図３　旋律を弾くとき、楽譜に明記されている指使い通りに弾くようにしていますか

「音楽Ⅱ」の授業では、ハ長調・ト長調・ニ長調・ヘ長調の童謡曲から需要の高い作品を取り上げ簡易伴奏法を指導している。コード記号を使った伴奏では、半分以上の学生が難しいと答えている。コード伴奏は、旋律の響きを聴覚で判断し奏され、音感が備わっていないとどの和音の響きが旋律の響きと調和するか判断に迷う。和音を見た瞬間、和声の響きが予め想像されなければならない。このことから、正しい音感を習得し音を聴き分けられる聴覚の発達を促すことは重要だと思われる。コード伴奏の指導だけでなく、ソルフェージュの視点から聴音学習による和声感の習得も考えられる（図４)。

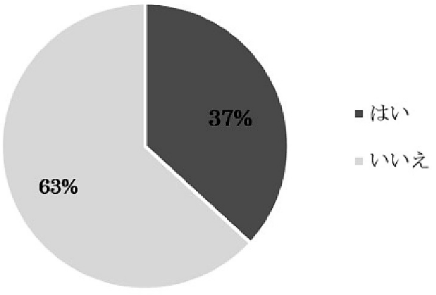

図４　コード伴奏（アレンジ奏）は容易にできますか

「音楽Ⅱ」で習ったハ長調・ト長調・ヘ長調・ニ長調の童謡の簡易伴奏は難しかったですか、の問いに関して、『バイエル教則本』を使用した学生の回答を類別した結果、授業用テキストとして使用した童謡の簡易伴奏法が難しかったという回答を多数得た。この授業用テキストは、実践に役立つ30曲の童謡曲を収集したものであり、各30曲にレベル１～４の伴奏譜が用意されている。学生は個々の能力に応じて伴奏譜を選択することが出来、バイエル終了者は大体においてレベル２の伴奏譜を使う。レベル２は、旋律とコード記号による伴奏付けであり、コード伴奏及びそのコードに基づいた簡単なアレンジ奏で伴奏する楽譜だが、これは基本的な簡易伴奏にすぎない。『バイエル教則本』を終了した学生は、楽譜に対する応用的な理解力が定まっておらず、楽譜に記されていない音をコード記号で弾くことに戸惑うことが多い。またこの教則本は様々なピアノの技法を学ぶ導入期の教材であり、方向性を考えた場合、簡単な童謡曲を簡易伴奏する技術の習得とは不一致な部分もある。『バイエル教則本』はピアニスティックな技術が要求されるが、その過程を終えた学生が、簡易伴奏に難を感じることはピアノ指導において原因があるものと思われる。更に、伴奏者は童謡のフレーズ感、曲調、歌詞の意味を十分に考え音楽表現豊かに伴奏し、歌う人を音楽的に誘導しなければならないが、ピアノの楽譜を見ながら伴奏することが精一杯の学生も見受けられる。伴奏者は歌う人と音楽を共有する為、周囲を見渡し合図をする等、伴奏に余裕がなければならない。これらの問題点の改善策を探りつつピアノ指導に役立てていきたい（図５)。

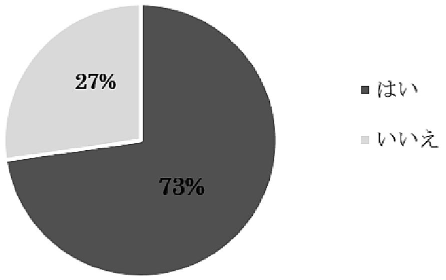

図５　音楽Ⅱに習ったハ長調・ト長調・ヘ長調・ニ長調の童謡の簡易伴奏は難しかったですか

この他、アンケート調査結果では、『ソナチネ』以上の学生は、コード伴奏（アレンジ奏）より既存の伴奏譜が簡単でありコード伴奏は難しいという回答を得た。これは、既存の伴奏譜では全ての音符・強弱表現の表示があり創作する必要もなく、技量のある学生にとって簡単に伴奏出来ると考えられる。ある程度弾ける学生には、むしろ即興的な伴奏法に挑戦し、作品への想像力を高める指導を施していきたい。

3．実践に役立つピアノ教則本について

⑴　国内で出版されているピアノ導入期用の教則本の紹介

現在、国内において海外出版を含め様々なピアノ教則本が販売されている。

数多く出版されているピアノ導入期用の教則本のうち、学生対象の教材として相応しいとされるピアノ導入期用の教則本を下記に挙げ、推挙する理由を述べる。

(i)『ピアノの基本　テクニック・マスター１指の形をよくするために』･『ピアノの基本　テクニック・マスター２きれいな音をだすために』

この『ピアノの基本　テクニック・マスター１指の形をよくするために』、『ピアノの基本　テクニック・マスター２きれいな音をだすために』は、どちらも（遠藤，2018）によるものである。前者以下、『テクニックマスター1』、『テクニックマスター2』は、ト音記号へ音記号のハ長調読譜からスタートしへ音記号に慣習出来るだけでなく、定位置による５指ポジションの指運動でもって指の形を整える練習曲である（図６　定位置での５指練習）。一方、分かり易いポジションでの重音の練習は手の強化を促し、固まり読みも出来るようになり、和声の響きを聴き分ける練習にも繋がる（図７　３度の和音連打）。

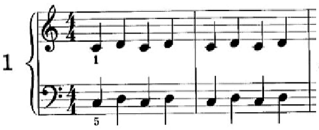

図６　定位置での５指練習

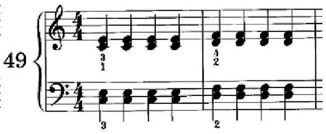

図７　３度の和音連打

後者は､前者を終了した後取り組む教材であるが､ハ長調を軸にポジション移動から、指の開閉練習、そして重音、持続音と段階的に指先の力の入れ方に配慮され安定性のある奏法へと導かれている。

(ii)『バーナム　ピアノテクニック 1』･『バーナム　ピアノテクニック 2』

この『バーナム　ピアノテクニック 1』･『バーナム　ピアノテクニック 2』は、（バーナム，1975）によるものである。アメリカで使用されている教則本であり、特徴的なこととしてパッセージに描かれている指運動を肉体的表現と結び付け、挿し絵から想像される感性で音色表現する練習曲である。学生にとって五線譜からの機械的な練習法でなく、挿し絵から指先の力の入れ方や身体の脱力を学ぶという手法はユニークである。全てハ長調で構成され小曲であるが的確にスケール、アルペジオを学ぶことが出来る。主要三和音の転回形は、簡易伴奏法で用いられることから、初期の段階で身に付けておくと良いと思われる（図８　主要三和音の転回形）。

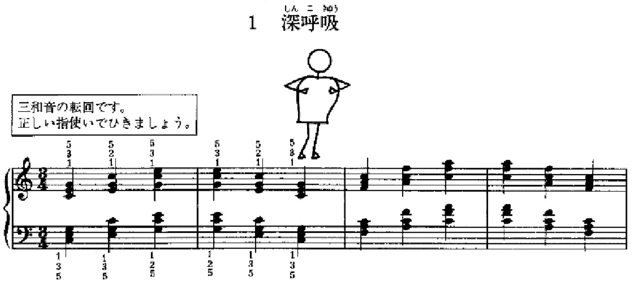

図８　主要三和音の転回形

(iii)『ツェルニー 30 番へのステップエチュード』

この『ツェルニー 30 番へのステップエチュード』（板東ら，2013）は、段階的なリズム学習から始まり三連符、十六分音符へと推移し構成は『バイエル教則本』と変わらないが、各段階のレベルに応じた音楽的な小品を取り入れ、ステップアップする毎に楽しい楽曲が弾ける利点がある（図９　チクタク時計）。

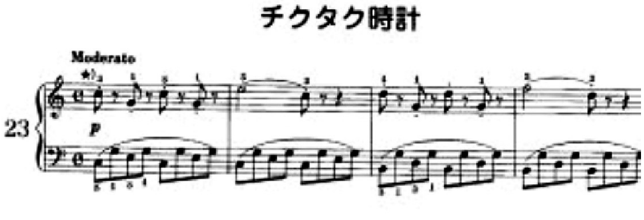

図９　チクタク時計

また、ハ長調、ト長調、ニ長調、へ長調、イ長調、変ロ長調の練習曲も分別され、必要な調性感を学ぶことが出来て童謡の簡易伴奏法にも役立つとされる（図 10　スケールの練習）。

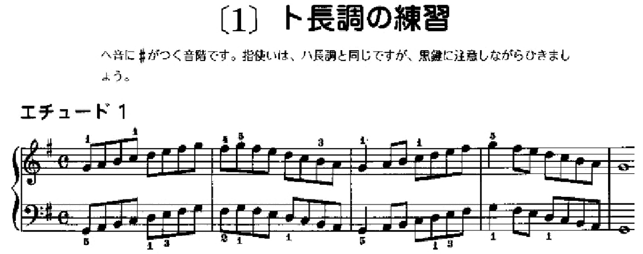

図10　スケールの練習

(iv)『ツェルニー　初歩者のためのレクリエーション』

この『ツェルニー　初歩者のためのレクリエーション』（伊達純編，1967）は、練習曲でありながら表題に世界の地域に纏わる民謡あるいは有名なオペラの旋律を用い、異国文化を味わいながら情緒豊かに表現する練習曲である。保育者を目指す学生にとって、世界の音楽に親しみ視野を広げることは、将来子ども達を教育する上で大切である。楽曲もブルクミュラーと比較すると小形式であり取り組みやすい。スラー、アクセント、強弱表現も巧みに指示され、構成的にまとまりがあり音楽的な感性が養われる。ピアノ演奏の基礎を習得した学生にとって、次のステップとして是非お勧めしたい教則本である。（図11　モーツァルトの歌劇《ドン・ジョバンニ》）。この曲は2重唱で歌われる旋律だが、こういった歌曲を弾くことで伴奏パターンに触れ、旋律に類した伴奏創作に役立つと思われる。

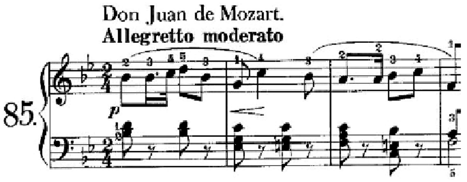

図11　モーツァルトの歌劇《ドン・ジョバンニ》

(2)　ピアノ教則本の新たな指針と改訂の必要性

ピアノ教則本は、学習者の目的意識と将来の展望に沿った内容であることが望ましい。出版されている教則本は年齢・目的関係なく全てのピアノ学習者対象であり、保育者を志す学生にとって、必要な練習曲もあればそうでないものもある。一冊の教則本で全ての必要な要素を補うことは難しいと思われ、保育者養成課程に学ぶ学生用に新たなピアノ教則本の改訂が望まれる。

(3)　ピアノ指導案について

新しいピアノ指導の方針として5つの段階的な枠組みが考えられる。まず最初のステップは、正しい演奏姿勢の指導である。正しい姿勢を保ち、手は3つの関節でしっかりと支えアーチ系にし、手首が下がらないように指先を立てることから始まる。『テクニックマスター1』、『テクニックマスター2』のようなハ長調によるユニゾン形式の曲を反復練習させ、手の骨格を鍛え指先の強化を促すことを徹底して指導出来ると正しい演奏姿勢が習慣付けられる。

基礎が十分に身に付いた後、第2のステップとしてリズム奏の練習である。音符の相対的な長さを知り一定のテンポで弾くための練習である。両手奏による異なったリズム奏で強弱拍のタイミングを捉え、拍子を理解する。大体の教則本は、ハ長調における定位置での5指練習であるが、使用される楽譜としてト音記号とヘ音記号の大譜表が望ましい。アンケート調査結果を見ても、ヘ音記号読みに難を感じる学生は少なくなく、早い段階からヘ音記号に親しむことは重要だと思われる。リズム奏に関しては、全音符、二分音符、四分音符、八分音符、三連符、十六分音符、そして付点音符、複付点音符、さらにそれぞれの休符の主要リズムを、段階的に拍感との対比で勉強する。そして拍子記号を学び、曲の構成に関して理解を深める。その過程において、簡単な表題作品を取り入れることも重要であり、美しい旋律をフレーズ感豊かに表現することで音楽的感性が養われる。例えば、ハ長調での定位置での5指練習曲として、『メトードローズ・ピアノ教則本』（安川，1951）、『ツェルニー30番へのステップ・エチュード』から抜粋で選曲しても良い。ハ音からト音の5指練習の次は、ト音からニ音へ移動し、更なる音域における指練習を行う。そして、親指におけるまたぎ指・くぐり指奏に入り、音階を弾く練習に入る。スケールの指使いは大変重要な奏法であるので、もっと念入りに勉強する必要がある。『バーナムピアノテクニック2』、『テクニックマスター2』では、スケールの学習が数ページに取り入れられているので、これらを参考にしたい。

第3のステップとして、臨時記号シャープ、フラット、ナチュラルの意味を理解し、調号の少ない調性（ト長調、ヘ長調、ニ長調、変ロ長調、イ長調、ハ

短調、イ短調）について学ぶ。これらの調性を学習する上で大切なことは、並行して主要三和音とその転回形を覚えることである。簡易伴奏法では、コード記号（アレンジ奏含む）を参考に和声付けする為、和声の知識を身に付けておくことは必要である。特にアンケート調査結果では、コード伴奏は難しいと答えた学生が過半数以上のことから、主要三和音を伴った練習曲に多く触れることは重要である。

楽曲における基礎的な演奏知識が身に付いた後、第４のステップは音楽を豊かに表現する練習である。『ブルクミュラー 25 の練習曲』がその対象であるが、簡単で有名なクラシック曲を取り入れても良いとされる。例えば、バッハ，シューマン、ギロック、ベートーヴェン、モーツァルト、ショパン他のオリジナルのピアノ曲のうち、初心者でも弾ける曲を選曲し課題曲に与える。学生にとって過去に聴いたことのある名曲を演奏出来ることは練習意欲に繋がり、上達への喜びを更に感じ得る。こういった作品は、将来保育現場でも役立ち、ピアノを習っている幼児達の前で先生自らクラシック音楽を演奏することで、子ども達がより一層音楽に対して愛着を感じ得るだろう。また、幼少期の子どもにとって保育現場の先生は親的な存在であり、先生が音楽を通して子ども達に問いかけることで、子ども達も安心して楽しい時間を共有し、先生に対して親近感も増すと考えられる。

第５のステップとして、ソルフェージュ（聴音）とリトミック（身体全体でリズムを体感する）指導を行うことである。聴覚を鍛えることは、コードの響きを予め捉え旋律に沿ったアレンジ伴奏にも繋がる。手法として、童謡に用いられている調性の主要三和音のソルフェージュ（聴音）を取り入れ、和声の響きを想定し聴く耳を育てる訓練をする。一方、リトミック指導は、音楽教育の一環として保育現場で子ども達に行われている。学生へのアンケート調査結果でも拍感・リズム感について難色を示し、これらは音楽に対して十分に体感されていないと考えられる。音楽は表現力も重要であり、それはどう自分が音を体感したか、である。拍子やリズムを身体を使って表現することで反射神経を刺激し躍動感を育成するだけでなく、即興的な感覚も身に付くとされる。

おわりに

本稿では、現在使用されている『バイエル教則本』、『ブルクミュラー 25 の練習曲』の有効性と問題点を指摘し、かつその他の教材も視野に新しいメソッドを考察してきた訳だが、学生へのアンケート調査結果から考えられることは、従来のピアノ教材での指導は、基礎的な音楽理論の習得と鍵盤での指の訓練に留まり、取得した技術における応用力と簡易伴奏への発展性が考慮されず、その結果、実践に導く「音楽Ⅱ」の簡易伴奏・コード伴奏が難しいとされ適応性に欠けるに至った。

新たなメソッド案として、学生のピアノ演奏における弱点を考慮し、基礎的な演奏技術・音楽理論の習得を段階的に能率よく学習させ、更に簡易伴奏法を視野にソルフェージュ（聴音）の指導、リトミックの導入を挙げた。現在において、保育者にかなりレベルの高いピアノ技量を要求する保育現場もあり、ピアノ技量が乏しい学生はあきらめざるを得ない状況にある。しかし、保育現場が求める高いレベルとは、一流ピアニストの演奏レベルでなく、如何に素都なく童謡を伴奏し、音楽の素晴らしさ・楽しさを子ども達に伝える能力が備わっているか、だと思われる。ソナチネ以上弾ける学生にとって、柔軟に対応出来る内容かもしれないが、ピアノ初心者にとっては至難の業である。このことから、保育者養成課程におけるピアノ教則本は、童謡の伴奏の手掛かりを見出す過程が盛り込まれ、実践に役立つ内容が相応しいとされる。

最近では、童謡曲の伴奏が CD 化され、先生がピアノを弾かなくても録音で対処出来る。しかし、生の音楽を聴くことは最善の情操教育と思われ、人の心を動かし感動を与える。子ども達は先生の演奏を見ながら、その先生の伴奏するリズムを鼓動と共に感じ取り歌ったり踊ったり生活の中に創造性を見出す。このような観点からも、保育者は音楽を通して、子ども達の心を掴める素養が必要である。ピアノ教育の原点はピアノ教則本がどうあるべきかであり、学習者の目的意識に沿った教材内容を打ち当て随時検討と見直しを行いながら、より良い教材作りに取り組みたい。

参考文献

丸山京子（2017）『ピアノ教本　選び方と使い方』，ヤマハミュージックエンターテインメントホールディングス出版部

三森桂子・正木文恵・湧口さくら（2019）「保育士・幼稚園教諭養成課程におけるピアノ演奏指導法」，『目白大学高等教育研究』，第25号，pp.63-74.

古屋晋一（2011）「ピアニストのための脳と身体の教科書」，http://www.piano.or.jp/report/03edc/brain/(2019/8/20)

参考楽譜

伊達純編（1967）『ツェルニー　初歩者のためのレクリエーション』，全音楽譜出版社．

エドナ・メイ・バーナム（1975）『バーナムピアノテクニック1』，全音楽譜出版社．

エドナ・メイ・バーナム（1975）『バーナムピアノテクニック2』，全音楽譜出版社．

エルネスト・ヴァン・ド・ヴェルド著・安川加寿子訳編（1951）『メトードローズ・ピアノ教則本』，音楽之友社．

遠藤蓉子（1998）『ピアノの基本　テクニック・マスター1指の形をよくするために』，サーベル社．

遠藤蓉子（1998）『ピアノの基本　テクニック・マスター2きれいな音をだすために』，サーベル社．

板東貴余子・石川淑子・池田典子編（2013）『ツェルニー30番へのステップ・エチュード』，ドレミ楽譜出版社．

フェルディナント・バイエル（1955）『バイエル　ピアノ教則本』，全音楽譜出版社．

ヨハン・フリートリヒ・フランツ・ブルクミュラー（1955）『ブルグミュラー25の練習曲』，全音楽譜出版社．

(受付日：2019年10月31日、受理日2020年1月15日)